法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-27

〈あのころの「誌要」〉『日本文学誌要』の思い出

関口，雄士

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
100
(開始ページ / Start Page)
34
(終了ページ / End Page)
36
(発行年 / Year)
2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

『日本文学誌要』の思い出

関口　雄士

わたしの『日本文學誌要』の思い出は、大学にはいって最初にくばられた第七十九号（二〇〇九年三月刊）からはじまります。

この第七十九号は「勝又浩教授・西野春雄教授退職記念特別号」で、巻頭には両先生に堀江拓充先生をくわえた鼎談「法政大学を語る―回顧、そして展望―」がおかれています。

鼎談では、ほぼ同時期（一九六〇年頃）に法政大学で学生時代をすごされたお三方が「入学した頃」「学問の方法」「法政大学の変化」「大学・大学院・研究所の役割」「国文学会・『日本文学誌要』のあり方」といった内容で語りあい、まさに法政大学日本文学科の半世紀がかんじられるものになっていました。

それは入学したての、法政大学や日本文学科、国文学会や歴代の名教員のことを、まるで知らなかったわたしにとって、それらを知るためのみちびきの糸のようにかんじられるものであり、何度も読みかえしたために、いまもって思い出ぶかいものとなっています。

その鼎談のなか、堀江拓充先生と、同席されていた藤村耕治先生のあいだでつぎのようなやりとりがなされています。

堀江　僕は、再々刊の時かな、『誌要』の特集で鈴木和雄さんたちと、草創期の頃とか国文学会の来歴を全部掘り起こそうとしたことがあるんだ。二、三号続けたんじゃないかな。でも、今、おそらく日文の学生たちは、法政の、そして日文科の伝統や歴史というものをほとんど知らないと思う。そういう時、僕らは何ができるのかな。

藤村　我々の学生時代も、私とか大学院に行こうという奴は興味を持って読んでましたけど、まわりの友達見てても、『誌要』なんて興味なさそうでしたよ、その頃すでに。でも、我々にとっては『誌要』に載るというのはすごいことで。私が初めてもらった『誌要』に四年生の論文が載ってて、「すごいなあ。学部生なのにこんなとこで活字になるなんて」と思いましたよ。

わたしは、このやりとりを読んで「よし、それならば自分は『日本文學誌要』をしっかり読んでやろう！」と、そ

れから時間があいているときは閉架で過去の『日本文學誌要』をめくるようになりました。そこで、授業をうけた先生方の論文や、過去の卒業論文を読みふけったことは、わたしにとってある意味では〈課外授業〉とでもいえるものであったのかもしれません。

＊

つぎにわたしにとって印象にのこっている『日本文學誌要』は、第八十五号（二〇一二年三月刊）です。

第八十五号は「特集　立石伯」で、堀江拓充先生のご退職にともなった特集になっています（立石伯は堀江拓充先生の筆名です）。当時、わたしは堀江ゼミのゼミ長だったため、〈思い出〉を寄稿するよう編集部より依頼をうけました。

論文ではないとは言え、いままで〈読むもの〉だった『日本文學誌要』に文章をのせるということに重圧をかんじたわたしは、先述の第七十九号をはじめとして、過去の退職記念号を読みかえしました。

『日本文學誌要』には、幾人もの先生方の退職記念号があり、それぞれに特色がありますが、そのなかで目をひかれたのが第三十六号（一九八七年三月刊）です。この号は小田切秀雄先生の退職号ですが、目次をみると埴谷雄高、本多秋五、佐々木基一といった『近代文学』創刊同人が名をつらねており、堀江ゼミで読んできたような文学者が『日本文學誌要』に寄稿していることにおどろかされたのと同時に、ゼミでの二年間でだいぶ戦後文学にしたしんできたなという気分にさせられたことをよくおぼえています。

（ところで、意外な顔ぶれの『日本文學誌要』といえば臨刊号（一九七四年九月刊）があります。再々刊前に出された号で、学生委員会が主催した「文学講座」の講演をまとめたものですが、寄稿者が小田切秀雄、柄谷行人、真継伸彦、黒井千次、後藤明生、長田弘、北川透、森川達也といったたいへん豪華な顔ぶれになっています。本文の内容からはずれますが、あまり知られていないのはもったいないようにおもわれるのでご紹介させていただきます）。

それでは退職記念号をたどることで、なにが見えてきたか。それは退職記念号が論文と随想（思い出）を両輪として、その先生がたしかに法政にいたことをしめすものであるということでした。

わたしの文章がどこまでそうした役割をはたせたかはわかりませんが、埴谷雄高『死靈』をおもわせる装丁の『日本文學誌要』を手にし、自分の文章が活字になっているのをみたときは感慨無量でした。

＊

最後に『日本文學誌要』そのものについて、のべさせて

いただきたいとおもいます。

『日本文學誌要』は、法政大学国文学会が発行している学会誌です。しかし、百号もつづいてきたとなると、そこにはそれ以上の意味もふくまれてくるのではないでしょうか。

この百号から六十年前に出された『日本文學誌要』第四号（一九五九年十一月刊）に杉本圭三郎先生が「平家物語の人間形象―清盛を中心に」と題する論文を掲載されています。

わたしが実際に見たことのある杉本圭三郎先生は、国文学会の大会でご挨拶をされるすがただけです。思い出などなきにひとしいです。しかし、六十年前の『日本文學誌要』をひもといたとき、ちょうどいまのわたしとおなじ年齢の杉本圭三郎先生が、おなじ法政大学国文学会にいたことがかんじられ、急に身近な存在におもわれました。

そうしたことがおこりえるのが、百号という歴史の大きさなのでしょう。

〈読むこと〉自体が法政大学国文学会の歴史をかんじることにつながる。『日本文學誌要』にはそのような面がある。

おもえば、わたしは期せずして、幸運にもそのような面にふれてきたのではないでしょうか。そして、そうした面はもっとふれられるべきものなのではないでしょうか。

そのようにおもうとき、本稿のはじめに引用した鼎談のやりとりがとらえなおされなければならないでしょう。二百号への道は、いまはじまったばかりです。

（せきぐち　たかし・博士後期課程三年）

日本文學誌要　臨刊号　法政大学国文学会

刊行にあたって　小田切秀雄　…2
第二回文学講座掲載に向けて　日文科学生委員会　…3

戦後文学の成立　小田切秀雄　…6
――戦争中から戦後へ――
戦後文学と私　柄谷　行人　…14
「わが解体」　真継　伸彦　…28
高橋和巳の抱えていたもの
戦後文学における異常と日常　黒井　千次　…37
敗戦と虚構　後藤　明生　…49
「言葉の荒地」　長田　弘　…57
戦後詩の転換　北川　透　…63
――谷川雁以後――
戦後文学は終ったか　森川　達也　…75

臨刊号　目次